

1925年 (大正14年) [21歳]

「辰雄日誌1925」No. 6 (2)

—— 1925年2月1～28日 ——

小池辰雄

○1925年2月1日 (日)

晴天。起床9時。聖書、葡萄の樹とその枝。午後、富山のところへ行く。色々話す。コーヒーを飲ましてくれた。ミルトンの『失樂園（パラダイスロスト）』を借りて来た。彼の語学の才、一朝一夕にしてなりしにあらず。我もまた「毎日少しづつ」の許に励まん。

○1925年2月2日 (月)

晴。雪は未だ解けない。今朝遅刻したのは面目なきことであつた。しかもグンデルト先生の時間であつた。それだけ、その時間は緊張して聴いた。名誉回復と思わるべき答をして、心もすこしおさまった。

「言い尽くし難き神の賜物につきて感謝す」(コリント後9・15)

右の太指末だ癒えず。神のよき誠をこれによりて、呼び起こし得るは感謝である。一日に為す量の少なきに恥づ。我が信足らず。誘惑に勝ち得ず、あわれみ給え。力を与え給え。鞭うち給え。

○1925年2月3日 (火)

晴。節分。

「我が言は過ぎ行くことなし」

雪を投げて中学時代のチャ目ぶりを発揮した。

「悔改とは自分自身に於ける正しい失望である。己が義を求めずして、神の義を求めることである。律法に活きずして、信仰に生きようとすることである。義人は信仰に生く——義人はその義に由りて信仰的でない信仰に由りて義とされたのである。信仰は徳ではない。自分自身のものに生きることでない。基督に生きることである。」

○1925年2月4日 (水)

晴。

「汝等主にありて其の大能の勢威に頼りて強かれ」

一体、僕が高等学校に入つたのはいつであるか。1922年(大正11年)、今より3年前



である。入学、入寮、そして知らざる人と一室に入れられ、知らざる友に交じり、高校生活にふみ入らんとしたときに、第一信を僕に送られたかたは誰であるか。涙なり、今は亡き方、召されて天に在る方である。愛の遺言、福音の遺言となった。それを思い出して今日ここにしるし、彼女「ママサマ」の願いに答え、以て祈り奉る次第である。書簡中より、

「……〔第2面後、辰雄様は御母様を御よろこばせ為る特権を持つて居つっしゃいますこと〔第3面、御覚えくださいます兄様方の御あとを何卒しつかり御歩み下さいませ。染井でもどんなにかよろこんで居つっしゃるでしょう。本当にありがとうございます。存じました。

……高島鴻子」

信仰の未だなかりし僕と云えどもこの愛と神への感謝、そしてまた僕のことを神に祈られたこのお手紙を戴いて、ある力を感じなかつたであろうか、ある愛の光を認めなかつたであろうか。その後、決心あり、ゆるみあり、放縦あり、病あり、病治あり、休学あり、転宅あり、兄の結婚あり、神の霊のおとずれあり、大手町あり、再び転居あり、水戸^{きすう}帰趨あり、進級あり、ゆるみあり、不信あり、病あり、休校あり、夏休みあり、水戸第2学期あり、暮あり、クリスマスあり、第2学期試験あり、第3学期あり、学年末而して来らんとす。ああ、3年の過去、ああ3年の過去、とただ云う。そこに無限の感慨あり。今までに此の如き3年をどこにも見出ださないのである。この3年ほど、色々の意味で、意味の深い3年はない。これからのちとともかかる年月はありそうにない。いやある意味からすれば、あつてはならないのである。勃々として起り来たるこの多感をいかに表わすべきかを知らない。ただ願うことは、罪より救い出されて、キリストの生命に生きんことのみに。神よ、主よ、願わくは願わくは、この罪人をあわれみて、天国へ生く資格あるものとなさしめ給え。アーメン。

Nothing in my hand I bring, Simply to Thy cross I cling;

Naked, come to Thee for dress; Helpless, look to Thee for grace;

Foul, I to the fountain fly; Wash me, Saviour, or I die! [Hymn Rock of Ages]

「十字架の他に頼む陰なき、わびしき我を憐れみ給え。御救いなくば生きる術なし。(讃美

歌260「ちとせのいわよ」)

今日、武田の叔母様から感謝の祈りの御手紙を戴いた。第2信である(今年)。高島の伯母様が召されて、淋しき僕は、ここに御光に、御恵に浴しつつある武田の叔母様を与えられ、彼女(オバサマ)を母上様と同じ様に敬し愛し行くことの出来るのを誠に感謝致します。どうぞ、武田の叔母様——それはまた兄上の敬愛せし叔母様である——の日に日に信仰に進まれお恵みに与らんことを。どうぞ、僕をお用い下され、叔母様をもお喜ばせおたすけることの出来るものとなさしめ給え。



○1925年2月5日(木)

晴。

「死人の中より立ち上れ、然らばキリスト汝を照らし給はん。」(エペソ5・14)

……「英文、独文の同聖句省略」……

運動せよ、而して節食せよ、然らば健康は保たれん。今日、体操の時間、勇敢に運動した。3対0で勝った(フットボール)。その最初の1点は僕が入れた。愉快だった。1時間はねまわって、ヘタバッタ。上衣を無造作にひきかけ、靴をだらしなくかけて、ノラクラ歩いて帰って来た。通る人が寒そうにマントを着ているのがおかしく見えた。自分は風が実にいい気持ちに感ぜられたのである。全身ポカポカしている。喝をおぼえて飲む水は格別である。

○1925年2月6日(金)

雨。深夜、地震がある。チョット驚いた。妙に暖かいと思ったらやつぱり来たのである。不徹底をゆるさず、なまぬるをゆるさず、この世のよろこび、笑い、ひやかしその妥協をゆるさず。

今学校で習っている“Hilys Essays”〔ヒルティのエッセー〕(実吉教授に)は実に立派な書である。以てヒルティの人格を知り、敬せざるを得ない。Die Kunst des Arbeitens〔仕事の仕方〕をやり Gute Gewissenheiten〔善き良心〕を読んでいる。

泥濘ぬかるみで今日は少なからずなやまされた。この間中の乾燥にひきかえて、今日は潤沢すぎる位である。クリスチャンの実をあげよ。愛の業をなせよ。汝は世の光なり、塩なり。

○1925年2月7日(土)

晴。今日は僕の第22回の誕生日である。神は今日で丁度21年間のこの世の生を与え給うた。感謝である。兄上二人、姉一人。政美、三郎、愛子は先だつて天国へ往った。地上には即ち龍二兄、富士子姉と僕とが残されて居る。神の招き給う日までこの旅路をあゆむ。父上は夙もとに去り給うた。母上はその時以来、奮闘以て僕達を育てて下さった。殊に僕が最も御恩を蒙かこつて居る。

母上は今、失明の身で居られる。これ僕のためである。僕の罪のためである。政美兄上、義の血を流して十字架を負い主に従い給うた。これ僕の為である。汝は貴き犠牲、主イエス・キリストによりて贖罪の恩恵を蒙りたるものなり。汝は過ぐる年月に実に大罪をおかした。然れども、

「最早我生くるに非ず、キリスト我にありて生くるなり」

であるが故に感謝してあまりあり。主よ宿り給え。アーメン。

右手に下し賜いし苦、聖旨なるが故に謹みて受けます。癒し給わん日を待ちます。

「忍耐たえしのびて汝の生命を全うせよ」



信仰に生きさせ給え。主よ願わくは、我、主のため、人のために働かんため、我が肉体を健全になさしめ給え。信仰に依りてのみ主の命に従い奉らんと決心するものであります。母上、叔母上よ、安かれよ。辰雄は飽くまでも御身等を神によりて守り慰め奉らんものなり。神よ、大なる神の栄光を輝かせ給え。人生の春は我に恵み来らんとす。「ビー・クリスチャン」の生涯を以て我が生涯となさしめたまえ。貴き主イエス・キリストの御名を通して聴こし召し給え。アーメン。満月。手術を受けたる晩7時。

○1925年2月8日 (日)

晴。失樂園と聖書。午後からガーゼのとりかえ。赤膚にヨーチン、非常にいたかったが、その瞬間、十字架を思い、既に苦は苦にあらず。何でもなく感謝したのであった。

○1925年2月9日 (月)

晴。就床9時。今日も別にすることなし。午後、宣ちゃんが『旧約と新約』55号とお金を家からとどけてくれた。早速、一気に読み終え、早速感謝状を藤井先生へ出した。

○1925年2月10日 (火)

晴。右手、次第によくなる。感謝を措いて何も無い。晩、あるもの来り、聞くに堪えぬ話をなす。あわれむべき輩のため、戦いを戦わんのみ。

○1925年2月11日 (水)

晴。紀元節、2585年。主あり、我乏しからず。我、餓えることなし。我、渴することなし。我、寒^{こた}えることなし。何ぞ思い煩わんや。

汝、ただ神の義を知れよ、歩めよ。

汝、ただ神の愛を知れよ、歩めよ。

汝、ただ神の聖業にはげめよ。

すべて信頼と待望の日なり。貴き一日なる哉、感謝なる一日なる哉。

「我は決して死なざるべし。我はなお生き永らえて汝等僧侶の悪業を宣言すべし」と大声叱咤^{しつた}せる、ジョン・ウィクリフの燃える信仰。我もまた此く立たん。

○1925年2月12日 (木)

晴。学校へ行く。ノートがとれない。手の具合思わしからず。夜、痛む。殆ど熟睡できない。

○1925年2月13日 (金)

晴。天晴れ、学校へ生きたくて行けず、ただ指に泣く。注射のやりすぎの様に思われる



指のはれがなならず。熱あり。冷やすことになった。夜、膿んでいることを知り、少なからず悲観した。三世堂病院を棄てた。

○1925年2月14日(土)

晴。春の様な日。自動車で駅へ行き、車で下市なる日赤へ行く。丹後さんに見てもらおう。かなり安心して帰って来た。東京へもうちよつとで帰るところ。

○1925年2月15日(日)

快晴。起床9時。11時頃出掛けて宣ちゃんのところへ行った。すこし話して、今日ついに水戸病院院長に最後の診断をたのみに行った。彼、老練にして、たちまちその根本を見破り、爪の本を切りはなち、完全に膿みを出して、痛くはあったが、さっぱりとして、根本的な安心を得た。二人で窪島様へ行つて、4時半まで色々お話したり、蓄音機を聴いたりした。愉快な午後だった。杉浦と二人で晚餐を認めて、ココアを飲んでお互いに愁眉の開けたのを喜びあった。未だ治ったというのではないが、彼に一任して僕は全快を得るの確信を得たのである。彼の聖旨、かしこみうかがいて、僕は指の思外に長くこじれたのを悲観しない。「我が恵、汝に足れり」であった。「驕らざらんために刺をくだし給うた」のであった。試験に間に合う様にして下さると確信する。ただ畏ることは、己、これによりて益々へりくだる、おちつきあるものとならんことである。これ神に対して畏れ祈り奉ることである。

○1925年2月16日(月)

晴。不信にして、愚かにして、弱虫にして、おちつきなく、鈍くして、時間も金銭も労力も徒費する汝は如何にして救わるや。如何にして聖潔めらるるや。黙々として神のいと厳かなる聖旨に従え。ただこれあり、他なし。

右の親指は癒されなんとす。汝は汝の預金を悉くなげうちてそのすべての償いをなし、人々と共に喜びの祝をなし、再び、己が愚のかかることに及ばざらんことを祈れよ。世話になりたる故に。而して只管走り進め、おくれたる汝の馳場の上を。神は必ず光り輝く日々を与え給わん。

我よりも父母を愛しむものは我に協わざる者なり。

我よりも子供を愛しむものは我に協わざるなり。

その十字架を取りて我に従わざるものも我に協わざるもの也。

然り主よ、我、誠に愚なりといえども、我は竟に汝の心理を最も愛するものなり。願わくは、それに生く人となさしめ給え。

今日、兄上より小包をいただく。その御好意誠に有難し。然れども、かかるお菓子、あ



あ神よ、果たして我が受くべきものなりや。我、母・兄の情に感謝す。然れども我が衷なる義、之を恕さざるなり。この度は、我が指の慰めのためにと思われての故ならんと察す。故に敢えてさほど拒みかえさんとはせず、人々と共にいただかんと思う。然れども、我、人生を十字架を負いて主に従わんと志すもの。争で通常人の喜び慰めを以てこれを受けて可ならんや。我は罪人の首なり。いかでかく慰められ、ほめらるるの価あらんや。我は決して、いばりてかく言うにあらず。我が衷なる心、痛み恥じてかく言わざるを得ざるなり。ただ誠に罪人なるがためなり。主に従い歩まずば生くるすべなきものなればなり。

武田の叔母様からお返事をいただく。僕のために喜び下さる。ああ、果たして我はかく喜ばるるに相應しき人なるや。我喜ばしきにあらず、我はみぐるしき極みなり。ただ我がけがれの身に時々光るものあり。そのものはこの世のものならず、いとも聖なる、美わしき光なり、愛なり、力なり。

○1925年2月17日 (火)

雪。雪が降って午後雨となった。指のために身体が消耗した。色々の事を思った。とにかく、「待てよ、忍べよ」がその答であった。すべての誘惑、困難は、

汝の兄は義の血を流して汝を残せるなり。

汝の母上は汝の為に奮闘して盲人となり給えり。

この二句によりて悉く汝に服するなり。汝、感泣せざるや。汝、奮い起たずや。汝、感激して十字架を負わずや。十字架のキリストよ、我が全霊全身をとらえたまえ。アーメン。

○1925年2月18日 (水)

晴。惜しかった。残念だった。ああすりやよかった。もつとやって置けばよかった。早くやりやよかった。食べなけりやよかった。こうするんじやなかった。と云う様な後悔の言葉ほどなきけないものはない。つまらぬものはない。これは不信の薄志弱行の無思慮のものの常に発する常習語である。而して問う、汝に於て如何と。

汝の若き日に汝の造主を記えよ。

ころばぬさきの杖である。これすべて不信より出づ。

辰雄よ、よく憶えよ。辰雄は基督の者なりと云う一句を。

○1925年2月19日 (木)

曇。今日、うなぎ屋とかへ行く。ああこれ我が本懐なりや。我が心、我が足進まず。汝には与えらるべき糧あり。彼等と共にうなぎやへ行く。うなぎやにながあつた。何を聞いた、何を見た。慾の外になにを見た。而して汝は時を費やせり。罪をおかせり。宣ちやんが桐寮のお別れにと云う。果たしてかくの如きものであらうか。僕はどうしても、ああ



この俗世の歓楽とは縁のなきものである。罪、罪、それが現に浮かんで来る以上、何を食べたつてうまいものではない。宣ちゃんもだんだん世間なれてきた。社交的になって来た。ああ遠ざかるもののみなり、我如何せん。ついに世俗とたたざるべからざるか。何にても可なり。ただ基督に従う、基督の導き給う道へと喜び進むのみである。

○1925年2月20日(金)

晴。バスケットボールがやりたくてムズムズしたが、未だ指のため、傍観していなければならなかった。試験勉強を始めた。仲々はかどらぬ。と云うのは普段のなまけからである。1週間この間休んだのは大分影響している。

今日、久しぶりで入浴した。あんまり背中を洗わないで、気持がわるかったから、生まれて初めて流しをやってもらった。良心が何となく恥じて、あんまりいい気持がしなかった。垢が出ることに際限なしである。とにかく、セイセイして帰って来た。

おお、クリスチャンよ、汝その名に恥じざる者たれよ。選ばれたものよ、汝のつとめは、人のためにあり。

○1925年2月21日(土)

晴。我が指、次第に癒えなんとす。我、^{おど}驕るべからざるなり。

我、次第に健康にならんとす。我、節制すべきなり。

内なる力はいとも貴き愛なる彼によりて満たさる。汝、恵まれたる者よ、神愛し給う。昔も今も後も。されば離るるなかれ、遠方に神の御許を。離れたるとき汝は死なり、サタンなり。汝、順風のとき心して神に頼りまつれ。^{わざわい}禍は驕りより来ればなり。

今日、窪島さんで宣ちゃんの送別のお饗あり、僕もよばれて行く。色々御馳走になる。10時まで愉快に時をすごした。今日は余寒の寒さを感じた。祈る。いと苦しき祈りなり。

○1925年2月22日(日)

雪。兄上の御命日。讃美歌を独りでうたう。寒く、午後から雪が降る。夜、友居らず。静かな聖日をまた独り享けていた。床に入ったのが12時。雪はやんでいた。すんだすんだ、しずかなしずかな、夜の空に、きれいなきれいな、宝玉より美しい星が眠れる白き屋根の上に淨き笑みをたたえていた。クリスマスの歓びを思い出して。

Joy to the World, the Lord is come!

Let earth receive her King,

Let every heart prepare Him room,

And Heaven and nature sing,

And Heaven and nature sing,



And Heaven, and Heaven, and nature sing. Amen.

「世界よ、よろこべ、主が来られた！」

この王を迎えよう、

みんなの心に受け入れよう、

天も自然も歌う、

天も自然も歌う、

天も、天も、自然も歌う。アーメン。」

○1925年2月23日 (月)

晴。試験近し。Plodding Genius [つつつつ型] なる僕は人一倍の時間を要す。短時間に concentrate [集中] することを練習しなければいかん。これは何事をなすにも実に大切なことである。精力、精神、注集。

○1925年2月24日 (火)

晴。早く終った。一友と共に常磐公園を散歩する。梅が三分通り咲いていた。香はない。雪が降ってしめったためか。例の吐玉泉へ行つて、水を飲む。水に勝る酒はない。あつく汗が出るほどであった。作文、「問題」と題して人生問題に筆が及んで、また、僕の信仰の一端が表われずには已まなかった。もう基督者なることが先生にわかったかも知れない。僕は、おおいにかくすことが出来ない。真理をまげることが出来ない。若し、これで3年に及第するとすれば、先生と云うものに見て戴く作文の最後がこれである。

○1925年2月25日 (水)

晴。過ぎしことすべて善なり、感謝なり。

さらば進めよ、光のうちを。

見る人、待つ人、たのむ人あり。

受けよ愛を、そそげよ愛を。

○1925年2月26日 (木)

晴。何れの神か汝に如^{しか}ん。汝は罪を赦し給うなり。

○1925年2月27日 (金)

晴。日本の教育、小学教育、中等教育、高等教育、現今のそれは何であるか。なすべき義務を有する僕、否、更に選ばれたる僕、この身を如何に捧ぐべきか。ああ思うなかれ。汝は汝の……僕は僕の日常に最も忠実ならんことを願う。神の、この器——いともけがれ



たれども、いとも小なれども——を必ず何事かに使い給うべきを確信す。しからざれば僕のために神のさきに蒔き給いし種はあまりに無意義なるの感がする。僕自身としても到底その種に対して、申し訳のない次第であり、また、僕自身を地獄の火に自ら墮するものである。さらば汝よ。いともけがれたる汝よ、汝はそのけがれを最早思うことなく、専ら神の清潔を祈り、注意有する。多くの偉大なる恩恵に全霊全身を浸し、全霊全身を、光と善と愛と忍とにて満たし、他の一切の悪をして入れしむるに余裕なからしめよ。

ああ、我がこの世の前途は知らず。然れども我は、人霊の為に捧げらるべき人なり。

〔以下落丁(破棄?)〕

○1925年2月28日(土)

晴。非常に寒い日である。

「彼はわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みづから懲罰をうけてわれらに平安をあたふ。そのうたれし瘡によりてわれらは癒されたり」(イザヤ53・5)

